
喫茶翠屋の星光さん

堕ちた聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶翠屋の星光さん

【Nコード】

N3661P

【作者名】

堕ちた聖騎士

【あらすじ】

もし『闇の欠片事件』でマテリアル達が消滅していなかったとしたら？これはマテリアル達と周囲の人々が織り成す、ほのぼのハートフルな日常を描いた『if』の物語。喫茶翠屋の星光さん、始まります。魔法少女リリカルなのはMaterial Wing of Revivalの外伝です。とらいあんぐるハート3の設定を少々使用していますが、wikiから得た知識なので誤りがあるかも知れません。

星光さんと高町家

S i d e S e i k a

「いらっしゃいませ。喫茶翠屋へようこそ」

今日も私、マテリアルの一基である星光の殲滅者（今は高町星華と名乗っています）は父上様と母上様が経営する喫茶翠屋でウエイトレスとして奉職中です。

2

何故『闇の欠片事件』で消滅した筈の私が此処に居るかを事細かに説明すると長くなるのですが。

私のオリジナルたる高町なのはに敗れた瞬間に途切れた意識が覚醒すると、海鳴市の人気のない公園に力のマテリアルたる雷刃の襲撃者と王のマテリアルたる闇統べし王と共に倒れていたのです。

紆余曲折の後、意思統一を済ませた3人でバリアジャケットのままで海鳴市内を当てもなくさ迷い歩いていると偶々オリジナルと遭遇、私の忠告を無視して力と王は戦闘を挑むものの敢え無く瞬殺、もとい無力化される。

ですが、それも当然の帰結といえました。

力の源泉たる『闇の書の残滓』が消滅した今、私たちマテリアルの体を維持しているのは己のリンカーコアのみで魔力ランクもオリジナルには遠く及ばないレベルに激減していたのですから。

そして、次元航行艦アースラに連行された私と死した屍同然の2人はアースラ艦長リンディ・ハラウンと執務官クロノ・ハラウンに面通しさせられ管理局に封印処理か消滅させられるのも已む無しと覚悟していましたが、『砕け得ぬ闇』の完成が最早不可能という点とオリジナル達の嘆願もあり、ある程度の期間監視はされるが命を拾う結果と相成りました。

相談の結果、力のマテリアルはハラウン家に、王のマテリアルは八神家に、私こと理のマテリアルは高町家に引き取られ、母上様と姉上様から星華という名前を頂き高町家の末席に加わったのです。

父上様と母上様は私をなのと同じ学校に入学させたいようなのですが、時期も時期なので編入は来年度からということになり、昼間時間のある私は喫茶翠屋での奉職を願い出て今に至る。

唯一困っているのは、母上様と姉上様が何かと私に色々な衣装を着せたがるのと、なのは達が妙に過剰なスキンシップをとってくることです。

「お嬢、桃子…さんが休憩に入るようにと言っているぞ」

「分かりました。」

「イレイン、後は頼みます」

「ああ、任せておけ」

メイド姿で現れて交代を告げたのは自動人形イレイン。

数日前の出来事を切欠に酔狂にも私の事を主と定め、お嬢と呼んで付き従っています。

詳しい詳細はまた語ることもあるでしょう。

今は休息をとらないと、無理をして働けば母上様の折檻が待っていますし………うう、想像しただけで寒気が。

S i d e O u t

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
.
.
?

星光さんと吸血姫？（前書き）

シュテル・ザ・デストラクター
星光の殲滅者 高町星華
レヴィ・ザ・スラッシャー
雷刃の襲撃者 レヴィ・T・ハラオウン
ロード・ディアーチェ
闇統べる王 八神冥夜

星光さんと吸血姫？

Side Another

星華達が私立聖祥大学付属小学校に編入して既に二ヶ月が経過し、星華はクールキャラ、レヴィはおバカキャラ、冥夜は我様？キャラとしてクラスに馴染んでいた。

特に星華はその容貌と纏う雰囲気がかールビューティーと呼ばれるに相応しく、文武両道を地で行く努力家で普通の生徒なら嫌がる雑用も進んで淡々とこなす為、教師陣の深い信頼を得るに至っている。誰に対しても分け隔てなく接してくれるので既にファンクラブがあるとか。

それはさて置き、この海鳴市にも梅雨が来訪。連日雨が降り続いていった。

「雨だね」

「雨だね」

「雨やね」

「雨ね」

「ええい、鬱陶しいぞ塵芥共!!」

「あ、あはは」

上からなのは・フェイト・はやて・アリサの順に窓の外を眺めながら憂鬱そうに「雨雨雨」と、眩くのを見て冥夜が激昂しすずかは渴いた笑みを零す。冥夜にしてもこの梅雨というものに対して思うところが多々あるのだが、こつも休み時間の度に愚痴を聞かされれば腹も立つというものだろう。

因みにレヴィは定期テストの結果が芳しくなかったのか、担任の先生によって連行済み。その際、涙目になりながら星華に助けを求めたのだが、自業自得なので救いの手が差し伸べられることはなかった。

「あれ、星華ちゃんは？」

「む、シュテルなら己の席で読書アイタツ!? 何をするか小鴉!!」

「や・か・ら、星華ちゃんの事をシュテルって呼ぶのやめい! あと、小鴉言っいな!!」

「くくく………王の頭を叩くとは、我がオリジナルながら中々の度胸よな。手向かうことを許してやるぞ、小鴉」

「ニートの分際で！今日こそ決着付けたる！！」

星華とレヴィの事を庇護すべき対象として大事にしている『閻統べる王』八神冥夜だが、八神はやてとの不仲は相変わらずで、二人の喧嘩に最初は戸惑っていたクラスメイトも今ではクラスの名物の一つとして捉えている節がある。まあ、本気で互いを憎みあっている訳ではないのでなのは達も基本は放置なのだ。

「また始まったわよ。全く」

「でもほら喧嘩する程が仲が良いって『言わへんわ（ぬわ）！』！ひうつ！？」

『フェイトちゃん……………』

「触らぬ八神に祟りなしね。ほら、避難するわよ」

ハリセンでの凄まじい叩き合いを始めたはやてと冥夜から思わぬとばっちりを受けて半泣き状態のフェイトを慰めながら、なのは達は星華の席がある最後尾の窓側へと退避していった。

S i d e O u t

S i d e S u z u k a

喧騒から離れて星華ちゃんに近づくと、まるで隔離された空間に入ったかのような感覚に陥る。

雨がシトシトと降り頻る窓辺で、伊達眼鏡を掛けて一人本を片手に佇む姿は思わず魅入っちゃうほど絵になっている。

さっきまで涙目だったフェイトちゃんも私と同じなのか頬を赤らめて視線を逸らす。

「あ、相変わらず独特の空気を醸し出してるわね。うわ、相対性理論の本って小学生が読むもんじゃないでしょ」

アリサちゃん、帝王学を勉強してる人が言える台詞じゃないよ。あと、照れ隠しになってないからね。
ううん。こんなに想ってくれる人が沢山居るなんて、妬けちゃうな。

「……………ほんと、美味しそう」

「ん？何か言った？すずかちゃん」

「ううん。何も」

「そう？」

危ない危ない、なのはちゃんに聞かれてたなんて。

実は星華ちゃんと出会った瞬間から一人の女の子として惹かれると同時に、彼女から微かに感じる人外の血を吸いたくて仕方がない衝動に駆られている私が居た。

気を抜けば押し倒してしまいそうになる。そんなこと、今まで一

度も無かったのに。

「ちよつと星華。大丈夫なの？」

「ええ、少々寝不足のようです」

そう言った星華ちゃんの顔色は確かに悪い。
けど、儂げな雰囲気加わって凄く色っぽく見えてしまった私は
不謹慎だろうか。

「もう！夜遅くまで勉強して、朝早くからお兄ちゃん達の鍛錬に付き合っからだよ」

「星華、無理しちゃ駄目だよ」

「それより、少しでも辛いなら保健室で仮眠を取った方がいいわよ」

「そう……ですね。さすが、少々付き合って貰えますか？」

『えっ!?!?』

「?????確か、すずかは保健委員の筈では」

「あ………そ、そういう意味。付き添っよ星華ちゃん」

「ありがとうございます」

一瞬勘違いしちゃったことを恥じながら星華ちゃんに肩を貸して保健室へと向かう。皆の羨ましがちな視線を感じたけど、今の私には拷問にも等しい。

うう、我慢できるかな。

S i d e O u t

T O B E C o n t i n u e . . . ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3661p/>

喫茶翠屋の星光さん

2011年9月2日08時15分発行